

【研究ノート】

「夢中度」と「安心・安定度」を用いた子どもの活動の評価と介入に関する研究

奥野正義

Child monitoring system for young children using the process variable “involvement” and “well-being”

Masayoshi OKUNO

1. はじめに

遊びなどの活動をしている子ども達には、活動に集中して楽しげに遊んでいる子どももいれば、1つの遊びに集中せず、おもしろくなさそうに次から次へと遊びを変える子どももいる。楽しく集中している子どもは、じっと見守っていればよい。しかし、遊びに没頭していなかったり、おもしろくなさそうに遊んでいる子ども達に対して、保育者はどのように指導・援助をすればよいのだろうか。

秋田ら(2011)は、保育の質に関するレビューにおいて、Laeversらのシステムについて次のように述べている。「日本の保育場面への適用を考えた際、情緒的に安心・安定して過ごすことと遊びへの没頭という着眼は、「養護」と「教育」の観点から保育所保育指針や幼稚園教育要領というナショナルカリキュラムができてきている日本の現状と合致している」と、「安心・安定度」と「子どもの夢中度」という視点を評価している。さらに、秋田他(2010)は、この尺度を日本の保育の場に適用するため、日本版の尺度の開発を行った。これは、「安心・安定度」と「夢中度」を保育者自身の自己評価で行うものである。保育者の振り返りをもとにして、保育の質について考えることが特徴である。また、中西ら(2013)は、この日本版の尺度を園内研修で実際に使用し、その有用性を確認した。

ところで、Laeversらが行った一連の研究の中には、やはり「安心・安定度」と「夢中度」の2つの指標を用い、クラスの中の子ども達の遊びを評価するとともに、問題の可能性のある子を抽出して、その子ども達に対してどのような指導・援助をすればよいかを考えたものがある(Laevers,

1997)。これらは、子どもが園で活動にどれだけ夢中になっているか、また、情緒的に、どれだけ安心・安定して活動しているかを評価するものである。これは、まさに、「今ここに生きている」子どもの活動に着目して、「保育の過程の質」を明らかにするものであると言えるだろう。ここでは、Laeversらの「夢中度」と「安心・安定度」を利用した「子どもの活動プロセスを重視した幼児観察システム」について2回にわたって報告する。なぜなら、彼らの原著は100ページを超える大学の報告として発表されているからである。

2. 「安心・安定度」と「夢中度」について

ここでは、子どもの活動の質をあらわすものとして、「安心・安定度」と「夢中度」の2つの指標を利用している。「安心・安定度」と「夢中度」は、Laeversの子どもの活動の評価システムにおいて最も重要な要素であるので、まず、この2つの指標について詳しく説明する。

2-1) 「安心・安定度」について

幸せで、安心している状態の子どもは、「水を得た魚」のように感じているだろう。このような状態で、子どもは周囲の環境に対し、オープンで受容的で、柔軟的な態度をとる。幸せで、安心している状態は、結果として、自信や自尊心、闘志を持つようになる。彼らには、また、活気やくつろぎ感がある。

2-2) 「夢中度」について

「夢中度」は、活動の内容についてではなく、活動の質についてである。ですから、「夢中度」を観察するとき、保育者が主に注目すべきものは、子どもがどんな遊びをしているか、上手に

信や自尊心は、ひるんでしまっている。彼らはまれにしか楽しむことができないようである。

(3)Level 3: 「安心・安定度」が変動したり、ニュートラルなレベル

このレベルの子ども達は、「幸せ」のように見える。彼らは、時々、感情的に不愉快なサインを示す。他方で、頻繁に、幸せのポジティブなサインを示す。彼らはリラックスしているように見え、比較的元気で、楽しんでいるように見える。彼らは、「安心・安全度」に関してニュートラルな印象を与える。つまり、極端に幸せでもないし、極端に不幸でもない。

(4)Level 4: 高いレベル

このレベルの子ども達は、一般的に幸せそうに見える。明らかに、幸せの瞬間は、不快な瞬間よりも圧倒的に多い。観察期間の大部分で、この子供たちは調子がよい。彼らは時々、感情の不快さを示すだけである。

(5)Level 5: 極端に高レベル

この子ども達は、明らかに、「水を得た魚」のように生き生きしている。彼らは、元気いっぱい、リラックスしていて、内的な穏やかさがある。彼らは、かなりの量の自信と自尊心の証拠を示している。彼らは、内なる自分と緊密に接触をしていて、自分のニーズや願いや考えを把握している。

2) 「夢中度」の5つのレベル

(1)Level 1: ほんの少しの活動か、もしくは活動がない

この level 1 には、普通、活動に参加していない子どもが分類される。彼らは、しばしば自分の前のほうをぼんやり見ていたり、まったくうわの空になっていたり、コーナーにもの憂げにただ座っているだけである。このレベルの子どもは、単に、保育室をブラブラして、目的もなく歩き回っている。一般に、彼らは、「何もしていない」のである。

(2)Level 2: 散発的な活動

このレベルは、散発的な活動だけを示す子どもである。これらの子どもは、パズルをしたり、洗面器で遊んだり、お話を聞いたりするが、その活動の時間は、クラスのみんなが活動に参加している時間の半分にも満たない。保育室をさまよったり、だらだらしているほうがはるかに

多い

(3)Level 3: 多少持続した活動、または、集中に欠ける活動

レベル3の子どもは、ある程度活動にかかわっているが、めったに、もしくは決して集中した活動を行わない。レベル1や2の子どもと比較して、その活動にいくつかの進歩がある。彼らのパフォーマンスは、意味のある行為の連続である。その結果、「活動」と言えることができ、単純な行為の単なる繰り返しではない。しかし、「夢中」になっているというサインは、見られない。これらの子ども達は、簡単に気を散らしやすく、長い間、同じ活動にかかわっていない。彼らは頻繁に「ふらついて」、活動を変える傾向がある。

(4)Level 4: 夢中になっている瞬間がある、比較的夢中になっている

この子ども達は、普通、活動的で、頻繁に「夢中」のサインを示している。その活動は、子どもにとって意味があるものである。子どもは、しばしば自分の能力の限界まで活動している。それでも、夢中になれないような瞬間がある。彼には、先生や仲間から、その活動を続けるための刺激が必要である。

(5)Level 5: 夢中になっている活動を維持する

このレベルの子どもは、しょっちゅう、活動に夢中になる。加えて、この子どもたちは、とてもたやすく夢中度の高いレベルに達する。彼らは、簡単に選択をし、いったん活動を始めると、それに心を奪われる。たくさんの「夢中度」をあらわすサインがある。周囲の環境からの刺激は、ほとんど彼らの気を散らすことはない。これが自然に行われる。子どもは、内発的に動機づけられている。

3) フォーム 1B に記入する際の留意事項

●過去2週間の印象にもとづいて、個々の子どもを独立に考慮し、評価する。あなたは、一人ひとりの子どもがどのくらいよく教室で行動していたか、自問自答すること。もしある子どもの評価について迷っているなら、「？」のマークに丸をつけるようにする。

●このあとの数週間にわたって、自分の評価が正しかったどうかチェックをする。もし必要なら、評価の終わった子どものレベルを変えてもよい。

●中間レベルの評価

子どもの評価が極端に変動する場合、2つ以上のレベルに丸をつけ、線で結ぶようにする。

4-3) クラスのスクリーニングのまとめ

1) 得点の解釈

得点を解釈もしくは処理するとき、次の3つの場合に分けておこなう。

赤：低 得点1と2

オレンジ：中もしくは「？」 得点3もしくは「？」

緑：高 得点4と5

(1) 赤は、問題がある場合

○「夢中度」に関して：これらの子ども達は、活動を十分に利用していないか、もしくは、自分のニーズを満たしてはいない。園での活動は役に立っていない。その結果として、子どもたちは、ほんの少ししか発達していない。

○「安心・安全度」に関して：子どもたちは、クラスで楽しんでおらず、幸せではない。これらの子ども達は、大人の直接的な注目を必要としている。これは、スクリーニングの紙に、赤で名前を囲むか、下線を引くことによって示される。これらの子ども達について言えば、第2段階の処理を行う。つまり、個人観察と個人分析を行う。

(2) オレンジの場合。

これも注意が必要である。うまく機能していない可能性がある。保育者の提案の活動がかこれらのニーズを満たしておらず、彼らの発達が行き詰まる恐れがある。これらの子どもにはオレンジのマークをつけ、第2段階の個人観察と個人分析を行う。

(3) グリーンの場合：これらの子どもについては、心配する必要はない。

2) 「夢中度」と「安心・安全度」の関連

「夢中度」と「安心・安全度」の得点を比較するとき、この2つの指標に関連があることに注意すべきである。実際のところ、「安心度」と「夢中度」は、密接に結びついている。

これは、実際、論理的なものである。クラスで情緒的に心地よくなかったり、不幸であるような子どもは、活動をすることが困難であり、活動しても、それに夢中になったり、没頭したりするこ

とは困難である。子どもは、情動的な問題にすっかり心を奪われてしまう。しかし、この逆の場合が起こることもある。もし、子どもが教室で行われる活動の中で、自分に合っているものを見つけられない場合（たとえば、活動がその子に難しすぎる）、彼はその活動に夢中になることは難しい。その結果として、彼は、そのクラスの中で「幸せ」にはなれないだろう。

3) その他の問題

○介入の問題

1回目のスクリーニングのあと、すでに介入のヒントを思いついているかもしれない。それは、コーナーで優先的に遊べるようにすることであったり、もしくは、個々の子どもの親と接触することであったりする。このように、初期の段階で、介入することは非常に有益である。なぜなら、介入の成功や失敗によって、子どもについて診断することができるからである。

○スクリーニングの回数

クラスのスクリーニングは、1年間に何回かおこなわれることが望ましい。これによって、子どもの発達や変化を見ることができる。9月、1月、4月に行うよう提案する。

5. 第2段階：子どもの観察と分析

1) はじめに

子どもモニターシステムの第1段階では、クラスでの子ども一人ひとりについての「安心・安全度」と「夢中度」の情報を提供した。第2段階では、スクリーニングで低レベル（赤）と中レベル（オレンジ）と判断された子ども達について、さらに詳しく見てみることにする。ステージ2は、また、「？」の印がついて、「安心・安全度」や「夢中度」のどのレベルにいるのか評価するのが困難な子どもについて考える段階でもある。

園の1年間の間に、何回か観察と分析をおこなうように薦めている。このようにすれば、どんな発達も追跡することができるようになる。

第2段階は、4つの部分で構成されている。

●個人の情報

●関連のある4つの分野での「安心・安全度」

●提案された活動への「夢中度」

●さまざまな発達領域で夢中になる

2) 子どもの個人情報

ここでは、次のことについて明らかにする(フォーム 2.1 参照)。

第2段階: 個人の観察と分析		フォーム2.1
氏名:	日付:	
個人データ		
氏名	クラス・グループ	
生年月日		
特記事項		

家庭の詳しい状況

全体の印象

- 個人データ
- 家庭の詳しい状況
- 全体の印象

「日付」は、このフォームに記入した時の日付である。何人かの子どもについては、ステージ2において、1年間のうち数回記入することになる

(1) 個人データ

子どもの氏名、ファイルを秘密にする場合は、名前ではなくコード名を使うほうが望ましい。次に、誕生日とクラス名。これで、その子どもが早生まれかどうか分かる。「特記事項」には、子どもの国籍やどここの出身か、園での出席状況などを記入する。

(2) 家庭の詳しい状況

家庭状況のデータは、子どもをよく理解するために重要である。これらは、子どもが成長している家庭や状況の特徴について述べる。両親の育児の方法や態度で注目すべき側面が、ここで述べられる。家庭でのいくつかの特徴は、危険因子になりうる可能性があり、他の因子と結びついて子どもに問題として現れることがある。実際、問題は、

常にいろいろな要素の結びつきや相互作用を通して起きるものである。

問題を解釈したり、可能な介入の方法を探すときに、これらの情報が考慮される。さらに、この情報は他の人にとっても重要である。この情報によって、その子どもや育児環境についての完全な全体像を作ることができるからである。

(3) 全体の印象

子どもは、それぞれ自分の気質や性格や容姿などを持っている。人々は、できるだけ明確に子どもの姿を呼び起こそうとし、彼の主な特徴に集中する。彼は、どんな印象を教室や園に残しているのだろうか。あなたがその子どもに持っているイメージの中で、最も目立つ特徴は何だろうか。「安心・安全度」や「夢中度」のデータとともに、この特別なことを書いておくことは、子どもの結論を得るときに役立つ。

3) 関連のある4つの分野での「安心・安全度」

クラスのスクリーニングによって、ある子ども達は、「安心・安全度」について低い得点や中の得点を与えられる。この子については、まだ結論を出すには早すぎる。これらの子どもの名前には、赤色かオレンジの色の印がついている。第2段階の個別の観察と分析を通して、これら低得点の子どもより正確な全体像を得るようにする。

「安心・安全度」は、子どもが周囲の環境とどのような相互関係を持っているのかに関係している。この相互関係では、4つの「関係性」に注目する。すなわち、先生との関係、他の子どもとの関係、遊びやクラスや園での世界との関係、家族との関係である。具体的には、「フォーム 2.2」に記録する。ここでは、次の3点が記入される。

- 説明
- 具体例
- 子どものついでの説明

(1) 先生との関係

クラスはグループもしくは個人の集合体として構成されている。子どもは、それぞれ自分自身の個性、気質、背景を持っていて、教室の中で子ども特有な態度をとっている。子どもはそれぞれ、クラスの活動や先生に影響を与え、逆も成り立つ。子どもと先生の間には、目に見えない、とらえどころのない結びつきが存在する。先生は、子ども

それぞれと関係性を持っていて、それは、先生自身の個性に彩られている。この関係性は、言葉や非言語の接触を通して形になり、明らかになる。先生は、ある子どもに対して、すぐに気がつき行動する。つまりポジティブな接触があり、相互に密接な関係性ができあがる。子どもの中には、先生との関係を断つような子どももいて、その場合、その人間関係はネガティブであったり、ほとんど存在しなかったりする。この場合、子どもも先生も、その人間関係に幸せを感じない。

この場合、この関係性における「安心・安全度」のレベルは何だろうか。この関係性で、子どもは幸せを感じているだろうか？ それはどのように知ることができるだろうか。

たとえば、次のような先生と子どもの場合である。ジャスミナは、私と話をしたが、我々の人間関係は表面的なものに留まっている。彼女ははじめられることもあるが、私に助けを求めに来ない。彼女は私といてとても幸せでもないし、私に不満があるわけでもない。彼女は、我々の関係に無関心である。(この場合、評価は、「中」か「3」)

(2) 他の子どもとの人間関係

先生と子どもの関係のように、子ども達同士の間にも目に見えない「糸」の蜘蛛の巣がある。子ども達はお互いに、さまざまな方法やいろいろな関係性の形で結びついている。これは、一緒に歩き回ったり、お互いの交流を楽しんだりという形で示される。しかし、ある子ども達の間には、ほとんど結びつきがない。彼らは、お互いに無関心であるように思える。非常にネガティブな人間関係になっている子ども達もいる。

ある子どもは、人気があったり、グループの中で心地よくしている一方で、孤立し、グループから疎外されている子ども達もいる。第2段階の個別の観察と分析を通して、他の子どもとの人間関係を調べ、この領域での「安心・安全度」のレベルを明らかにする。

(3) 遊びやクラスや園生活での関係性

先生や他の子どもとの個人的な人間関係は別にして、子どもにとって、クラスの生活や園生活はどんな意味があるのかを見つけることが、この目的である。

ここでの重要な側面は、子どもが遊びの材料や

遊び場所に対応する場合の方法である。

つまり、その子どもはものをよく壊すのか、遊びの材料で遊ぶことを拒否したりするのか。もし一人の子どもが同じおもちゃによく手を伸ばすなら、彼はクラスで不安になっているので、それにこだわっているのかもしれない。同じコーナーで何度も何度も繰り返し遊びたいということは、子どもが困難な経験に対処しようとしていることを示していて、一時的に、クラスの残りの子どもに心を開いていないのである。子どもがあるコーナーやある活動を一貫して避けようとしているときは、情動的な意味合いが存在する。

園やクラスの環境の中で、次のようなことに子どもはどのように対処しているのか。

●利用可能な広い空間：子どもは教室の中を自由にくつろいで動いているか？

●一日の園生活の活動：子どもはグループ活動やルーチンとなっている活動に、心地よく参加していただけるか？

●予想外の出来事：見知らぬ人が教室に入ってきたとき、どのように行動したか。

(4) 家族や身近な友だちとの人間関係

子どもは社会活動の4番目の領域、つまり、両親や兄弟姉妹とともに活動する。

この領域には、家族に「関連する」他の人々も含まれる。つまり、子どもの面倒をよくみるおばさんや祖父母などである。なぜなら、彼らは、子どもの家庭状況の一部分を形成しているからである。つまり、彼らは、頻繁に「親の地位」を占めることがある。

この領域について、観察による洞察を得ることはなかなか困難である。なぜなら、彼らと直接的な接触や頻繁に接触する機会がないからである。でも、この関係性がどのように働いているのか印象を得る手段や方法はある。たとえば、

●子ども自身が語る話を通して

●送り迎えをするときの両親と子どもの様子を観察して

●両親の話を通して

社会活動の領域で意見を述べようとするとき、先生は、しばしばためらいや抑制を経験する。なぜなら、家について語る子どもが本当のことを言っているかどうか確信が持てないからである。

子どもの中には、空想する傾向のある子どももいる。さらに、子どもを送り迎えする瞬間は、親と子どもの人間関係の短くて、断片的な印象しか残さないからである。子どもの中には、このような瞬間に、親に逆らう習慣のある子もいるからである。

結果として、この領域の子どもの「安心・安全度」についての情報を得るには多くの時間を必要とし、他の3つの領域との比較も必要である。さらに、家庭訪問をして、親の評価をすることも必要になるだろう。

(5) このフォーム 2.2 を完成するときの留意事項

第2段階: 個人の観察分析	フォーム2.2
氏名:	日付:
4つの人間関係の領域での「安心・安定度」	
全体の「安心・安定度」: 低 中 高 ? 1 2 3 4 5	
社会活動の4つの領域の「安心・安定度」	
先生との人間関係 低 中 高 ? 1 2 3 4 5	
他の子供との人間関係 低 中 高 ? 1 2 3 4 5	
遊び、クラスや園生活との関係 低 中 高 ? 1 2 3 4 5	
他の家族との人間関係 低 中 高 ? 1 2 3 4 5	

●最初に、子どもの「幸せ度」のレベルを全体的に評価する。これは、普通、クラス・スクリーニングにもとづいて行われる。しばしば、この評価は、後で変えられることがある。

●次に、社会活動の各領域をそれぞれ個別に眺めて、問題となる子どもの状況がどのように見えるか説明してみよう。同時に、各領域で、子どもがどのように幸せを感じているのか評価する。2つの評価のしかたのうち1つを選んで、評価の点数をつける。

次のような場合はありうる。第1段階で「安心・安全度」の(3点)の子どもが、先生との人間関係はよいが(4点)、他の子どもとの人間関係はかなり悪い(2点)。第2段階で、「安心・安全度」

の低いレベルの情報を得たことになる。これは、第3段階において、社会活動のどの領域に介入が必要かを明らかにしているといえよう。

●引用文献

F.Laevens, E.Vandenbussche, M.Kog & L.Depondt
A process-oriented child monitoring system for young children, Centre for Experiential Education, 1997

秋田喜代美・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・箕輪潤子・小田豊・淀川裕美「保育プロセスの質」研究プロジェクト編「子どもの経験から振り返る保育プロセス」幼児教育映像制作委員会, 2010

秋田喜代美・佐川早季子 2011「保育の質に関する縦断研究の展望」東京大学大学院教育学研究科紀要, 第51巻, 217-234

中西さやか・境愛一郎・中坪史典 2013 子どもの「今、ここ」という視点は保育者に何をもたらすか - 保育カンファレンスの議論に着目して - 幼年教育研究年報 第35巻 45-51